

## 音楽学習における「めあて」設定に関する批判的検討

安久津太一\*

**要旨** 本研究ノートでは、音楽学習における「めあて」設定に関して、事例を示しつつ、音楽演奏及び音楽教育の実践者・研究者の立場から批判的な検討を加える。音楽科においては、音楽に内在する複雑かつ課題と不確実性を含有する課題と向き合う必要があり、時に「めあて」の設定が、探求的な問題発見や解決を阻むことがある点を指摘した。

**キーワード**：音楽学習、めあて、批判教育学、問題開発型及び解決型の学び

2020年度から順次施行されている新学習指導要領では、「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力」の育成、「学びに向かう力・人間性など」の涵養を、育てたい資質・能力の3つの柱に据えている。音楽科においても、「何ができるようになるか」「何が身についたか」の入り口と出口を明確化し、特に音楽活動の評価においては、目標に準拠して、目の前の子ども達に寄り添いつつ、教師自身が評価の場面や評価規準を焦点化することが求められている(志民, 2022)。

筆者は音楽教育の実践を含む音楽教育学とヴァイオリン演奏を含む弦楽器教育の双方を専門領域としていることもあり、国内外の学校園で、演奏や研究授業に立ち合うことが多い。その際、頻繁に向き合ってきた課題が、特に小学校以上の学校現場における「めあて」の存在である。教員養成に関わる一員として、授業における「めあて」設定の必要性和重要性は十分理解している。他方、演奏家として、あるいは音楽教育の研究者として、改めて音楽科の「めあて」を概観すると、その必要性も含めて、批判的な検討が必要と考えるに至った。本研究ノートでは、筆者が学校現場で経験した事例を起点として、「めあて」の存在についての課題を整理する。

なお、補足になるが、本論タイトルにある用語「批判的」は、教育学の中の批判教育学に紐づけて、意識的に用いた。子どもの頭が空っぽで、銀行預金のように一方通行で知識や技能を詰め込むことを「バンキング・スタイル」、すなわち「銀行型教

育」と呼称し、従来型の教育学を批判した、パブロ・フレイレのクリティカル・ペダゴジーに端を発する。フレイレは人間の生活や文化を重んじた論者であることにも立脚し、本論では、人間にとって音楽とは、芸術とは、文化とは何かという根源的な課題を土台に論じたい。批判教育学は、日本の教員養成で大きく扱われることが少ないが、筆者が経験した米国の教員養成の現場では、フレイレの著書が音楽科教育法の授業で教科書として採用されるなど、大きなシェアを占めていた。学校も含む社会の抑圧や自由の課題と向き合うマルクス主義の社会学の理論の流れを汲んでいるが、深い理論的検証は他稿に委ね、ここでは以下に実践に即した事例を紹介することとする。

### 「カノン」を題材にした小学校音楽科授業における「めあて」設定の一事例

最初に、ある小学校で行われた「カノン」を題材とした器楽の研究授業における事例である。小学校高学年を対象とした2校時連続の特別授業で、担任教師と筆者が協同して執り行う授業であった。その日は音楽科の2コマを授業として充てていた。学習院大学、横浜国立大学、ニューヨーク市立大学をテレビ会議システムでつなぎ、研究者等が一堂に会して視聴し、さらに、市の教育委員会からも現場での参観があった。

10時50分から授業だったが、筆者は、学習の場を和ませる意味合いもあり、楽器の準備も含めて自

\* \* 岡山県立大学 保健福祉学部子ども学科

由に児童が音を探求する時間を想定していた。しかし、授業開始とほぼ同時に、担任教師が、「先生、めあて、先に良いですか。」と申し出て、板書をしつつ、「いろいろな楽器でカノンを楽しく演奏しよう」という「めあて」を児童に示した。そして、児童は板書を一齐に読んで、「めあて」を共有した。

なお、教師が板書で「め」と書き、その字を丸で囲んで示すと「めあて」を、そして同様に「ま」は「まとめ」とされる。これを知らない小学生は、おそらく存在しないほど、全国津々浦々に普及している授業の標準化された手順であり、音楽科においても例外は少ない。

ここで筆者が疑問に感じたことを整理する。第一に、特に音楽科においては、「め」が無い授業回があっても良いのではないかと、いう点である。そもそも、音楽科では、授業の単位を単元と呼称せず、題材として捉える。その心は、一つの教材や内容、音楽の要素が、連続性をもって、前後を切り離さずに学習が段階的に進むことである。めあてが細分化されることで、授業のつながりが阻害される場合があることに、留意が必要ではないか。

第二に、音楽科は探求的な時間や音との接点で授業が始まる方が、音楽的なアプローチが実践でき、児童の実態の把握にも即している面がある。最初に「め」ありきではなく、音を介した探求や協同を観察することも、有用な方策である。時に子どもの素朴な音との接点から得られる疑問や発見からめあてがみえる場合も想定できる。

ここからは、筆者の演奏家として、そして教育学系の研究者の立ち位置から、それぞれ検討を加える。

### 演奏家の立場からの批判的な視点

筆者はこれまでに音楽大学やアメリカの音楽院でのトレーニングに加え、オーケストラ演奏に特化した修士課程を修了し、かつフロリダ州に拠点をおくニューワールド交響楽団に在団し、3年間専門家としてオーケストラ演奏に従事してきた。この間、数千回以上リハーサルや本番を経験してきたが、「めあて」が明確なりハーサルはほとんど存在しなかった。その場での演奏で遭遇する未知の課題を、指揮者、あるいは時としてオーケストラ側が特定し、随時問題解決が行われていた。従って一つリハーサルに、速度や音量の変化、バランス、音色、フレーズ等、多岐にわたる内容が脈絡なく含まれていた。筆

者が在籍していたオーケストラは、世界的な指揮者マイケル・ティルソン・トーマスが音楽監督だったが、ある日突如計画以外の自作の作品を持参して予定外の演奏を試みたこともあった。またヴァイオリンの名匠イツァーク・パールマンが、指揮をしつつヴァイオリン協奏曲を演奏した際には、アーティキュレーションにこだわるあまり、練習時に3楽章中2楽章しかカバーできず、終楽章はぶっつけ本番となったこともある。計画的なりハーサル進行も大切だが、演奏の臨場感や、阿吽の呼吸ともいえる臨機応変な対応が、音楽演奏の魅力の一つだろう。音楽科の授業の「めあて」設定は、音楽家の立場からすると、時として、分化されすぎ、結果的に形骸化している感が否めない。

### 教育学研究の知見を踏まえた学術的検討

最後に、研究者の立ち位置から、コロンビア大学教育学部の音楽教育の研究と実践事例と照らし合わせて検討する。

ランダール・オルソップは、音楽教育学の哲学研究の第一人者だが、マキシム・グリーン<sup>1</sup>の芸術の哲学に立脚し、音楽科におけるオープン・ペダゴジーの必要性を提唱している (Allsup, 2022)。昨今アメリカ合衆国の教員養成系の大学のシラバスでも、目標設定が重要視されていることを批判的に指摘しており、問題開発型・探求型の学びの重要性を説いている。実際同氏の授業を筆者は頻繁に参観した経緯があるが、常に最初に課題揭示や問題を絞り込まず、オープンに議論が展開される様は、白熱教室ながらであった。音楽教育学の教育方法の授業内でも、哲学や理論も扱うが、一方通行の講義は皆無であった。

なお、Allsup (2022) は、自身のコロンビア大学における授業のシラバスを例示しており、達成目標ではなく、音楽学習に関わることや表現することを目標として掲げている。具体的には、自身の音楽学習者としての過去の経験を省察すること、学生が音楽や文献も含めた対象や他者と対話すること、教師主導の従来型と異なる、オープンで呼応的な教授法を経験すること、即興的で創造的な音楽活動に参加することなどを講義の「めあて」に挙げている。まだ研究が途についたばかりでもあり、深い議論は避けるが、我が国の音楽科に求められる目標や評価の観点は、音楽教育のみならず、音楽の専門家の立場

に加え、国際的な視点、そして、先進的な教育学研究の視座からも検討を加える必要性が示唆された。

#### 引用・参考文献

- Allsup, R. (2022). *Remixing the classroom: Toward an open philosophy of music education*. Indiana University Press.
- 志民一成 (2022). 『新学習指導要領に対応した学習評価』独立行政法人教職員支援機構

## **A critical analysis of setting the objectives in music learning and teaching**

TAICHI AKUTSU \*

*\*Department of Childhood Studies, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University*

### **Abstract**

This case study critically analyzes the process and meaning of having set objectives in a music class at an elementary school from the perspective of practitioners and researchers of music performance and education. In music classes specifically, instructors often have to deal with complex issues that are inherent in music. This study demonstrates that setting objectives can stifle learners' exploration and opportunities for problem identification and problem solving.

**Keyword** : Music Learning, Learning Objectives, Critical Pedagogy, Problem Solving and Finding